

「言語」と「ことば」に関するメモ： 「文」の価値(位置)をめぐって

EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University
Ibunka / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2017-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013801>

〔論文〕

「言語」と「ことば」に関するメモ

— 「文」の価値（位置）をめぐって—

On “Language” and “Speech”

—Concerning the Value(Status) of “Sentence” —

江村裕文

EMURA Hirofumi

0 はじめに

本稿は、日本語の「言語」と「ことば」の使い分けを明らかにしようという試みである。そういう意味では、人のコトバから、言語学はいったい何を研究すべきかを追求したソシユールの試みにも比すことができるかもしれない。

三鷹のアジア・アフリカ語学院で、西江雅之先生の「言語学」の講義を拝聴したときから、言語とことば、あるいはコミュニケーションにおけることばの問題は、ずっと私のコトバに対する興味における通奏低音のように、常に根底でなり続けていたテーマであった。ここに、長年の宿題をかたづける絶好の機会を得た。この原稿を書き進めているところに、恩師西江先生の訃報がもたらされた。これも何かの縁を感じざるを得ない。

「文」をどう考えるか、どう捉えるかを手掛かりに、まず、ソシユールの「langage, langue, parole」論を、次いで、マルティネの「code, message」論を、さらにチョムスキーの「competence, performance」論も視野に入れながら、日本語の言語とことばについて考えをめぐらしてみたい。

1 ソシユールの場合

ソシユールは一般に「ことば」を、「langage (ランガージュ)」「langue (ラング)」「parole (パロール)」の三つに区分した。「langage」は人の「ことば」全般を、「langue」は「個別語」つまり「～語」、たとえば「日本語」「ドイツ語」「フランス語」等々を、「parole」は個々人が母語を話したときの、その「～語」の具体化した、実現化した「ことば」を、それぞれ意味する。別の言い方をすると、人類の「langage」は、その社会的な側面である「langue」として実現し、「langue」は、その個別的側面である「parole」として実現するといういい方もできる。

と、ここまでは非常に一般的なソシユール理解といえると思う。が、ここに「文」が絡んでくると問題がややこしくなってくる。

ここで、参照している文献について紹介しておきたい。まず第一は、小林英夫訳の『一般言語学講義』(以下『講義』と略す)、第二は、丸山圭三郎編『ソシユール小事典』(以下『事典』と略す)、第三は、丸山圭三郎著「『一般言語学講義』の基本概念」(以下「基本」と略す)、第四は、小松英輔編『一般言語学第二回講義』(以下、『第二回』と略す)、第五は、小松英輔編『一般言語学第三回講義』(以下『第三回』と略す)、第六は、景浦・田中訳『一般言語学講義 コンスタンタンのノート』(以下『コンスタンタン』と略す)の六点である。

ソシユールのいう「文」は「phrase」の訳である。①

ついでに「ラング」「パロール」も確認しておきたい。「ラング」は「言語」②と、「パロール」は「言」③、「パロール」④、「言葉」⑤、「発話」⑥と訳されており、「ラング」は「言語」(複数形の場合は「諸言語」)で統一的に考えてよいであろうが、ここでは「ラング」を採用しておきたい。「パロール」の訳は統一的ではないが、ここでは「パロール」を採用して議論を進めていきたい(以下、ラングとパロールの括弧を外す)。

では、ソシユールは「文」をラングとパロールのどちらと考えてい

たのであろうか。『講義』では、

文はすぐれて統合の典型である。ところが文は言（パロール）にぞくし、言語（ラング）にはぞくさない。とすれば、統合は言（パロール）のなわばりだということにならないか？われわれはそうは思わない。言（パロール）の特性は統合の自由にある。⑦

『第三回』では、

一つの文の中には、その思考（パンセ）を表現するために、各々の選択に任された組み合わせという個別な要素が常にあります。この組み合わせは、言葉（パロール）に属しています。というのも、それは実践だからです。⑧

というわけで、〈研究には、言葉（ランゲージュ）の個的な部分、言葉（パロール）の研究を含んだ部分〉、発話（フォナシオン）を含んだ〈部分〉があります。これが言葉（パロール）の研究であり、そして二番目の研究が、個の意志を向こう側へ置いた言葉（ランゲージュ）の部分、社会的な契約である言語（ラング）の研究です。⑨

ところで、文は言葉（パロール）に属し、言語（ラング）には属していません。⑩

『コンスタンタン』では、

ところで、文は発話（パロール）に属し、言語（ラング）には属するものではありません。⑪

と、それぞれなっていて、一貫して文はパロールであるということになっている。これを図示すれば、

ラング	パロール
語	文

ということになる。さらに「統合」という概念を加えて図示すると、

ラング	パロール	
語	+統合	文

ということになる。この考え方はソシュールのテキストを読み取る

限りにおいて妥当であろう。

町田健も、

どんな言語でも、文を作っている単語を並べる方法にはきちんとした規則があります。そして、同じ言語を使っている人たちのあいだで事柄が正しく伝達されるためには、単語を並べるための同じ規則が共通に知られていなければなりません。(中略)

単語を並べるための規則を、同じ言語を使っている人が共通に知っていなければならないのだとしたら、こういった規則もやはりラングの要素に含まれると考えることができます。ソシュールは、「文という単位はあまりにも多種多様でお互いのあいだに共通性など認められないから、ラングに属する単位とは言えない」と述べています。⑫

と書いているのは、このことを説明していると解することができる。ソシュールという思い出されるのが時枝誠記の「言語過程説」である。上に述べたソシュールの「文」に関する議論に相当するのが、時枝の「語」「文」に関する議論である。

時枝は、以下のように、「語」「文」「文章」という次元の異なる三つの単位をあげている。

単語が言語において把握せられる全一体なるものであり、一の統一体であり、その意味においてこれを言語の単位と称することが出来るとするならば、言語において単位と考え得られるものは単に単語のみではない。「文」もまた言語における単位と考えなければならない。文は決して単語の集合でもなく、単語の連結でもなく、文が文となるためには、それ自身を一体とし、統一体とする条件が必要である。⑬

言語における単位的なものとして、私は次の三つを挙げようと思う。⑭

- 一 語
- 二 文
- 三 文章

ここで再び最初の文法学の対象は何であるかの問題に立返って見る

ならば、文法学は、言語における単位である語、文、文章を対象として、その性質、構造、体系を研究し、その間に存する法則を明かにする学問であって、(以下略) ⑮

文法研究に、質的統一体としての単位概念を導入するならば、文及び文章も、語に劣らず、言語における厳然たる単位として認められなければならないのである。⑯

ここでは、「文」は「語」の連結であるという以上の意味をその統辞形式の上に持っている、とされている。これを図示するとソシユールの図に重なる。

a		β
語	+ 統辞形式	文

この a 、つまり「語」(+ 統辞形式) や、 β 、つまり「文」をどういうレベルのものかという名づけを時枝はしていないが、「語」と「文」に関しては、ソシユールと時枝の距離はそれほど遠くないといえよう。

さて、ソシユールによれば、

単位とはすなわち差異であり、その差異が認められるのは「語」においてであるから、「語」がラングであるという議論になる。(中略) ところが、文と文との間にあるものは差異ではない。⑰

辞項 A が、他の辞項 B、C、D・・・との間に持つ差異が、辞項 A、B、C、D・・・の価値を決定する。文と文の間にある関係はこのようなものではない。⑱

としており、前田(1978)は、「結び」として、「文や文章が相互に持つ多様性、単位としての差異に関わることのないこの多様性こそ、パロールをラングから区別する根本的な指標となる。⑲」と述べている。これらの議論を踏まえれば、ラングは「語」であるというのはゆるぎない事実であるように思える。

ところが『事典』には、

このようにして、連辞／連合、ラング／パロールの二分法が微妙に

ずらされるのは、文とディスクール（discours）においてである。⑳

という記述がある。この微妙なずれとは何か。

ガデ(1995)は、

しかしながら、連辞（サンタグム）および文（フラーズ）のステイタスが、ソシユールにとって微妙な主題であることは、疑う余地がない。文が問題になるたびに、テキストによって表出される居心地の悪さを引き合いに出すほかはない。「まず、文はどの程度までラングに属するのだろうか。もしそれがパロールに属するものであるならば、言語単位として通用するわけにはいくまい」（p.148）。㉑

と書いていて、文のステイタスを問題にしている。

『第三回』では、先に引用した

ところで、文は言葉（パロール）に属し、言語（ラング）には属していません。

と書いたすぐ後に、

異議。連辞は言葉（パロール）に属してなくて、そして、二つの領域（連辞的－連合的）を区別するために、私たちは二つの領域（言語（ラング）－言葉（パロール））を混同してしまっていないでしょう [か]。

（結局、領域の境界は微妙なのです）。解決困難な問題。（中略）

連辞の微妙な点とは、言葉（パロール）と言語（ラング）との区別なのです。㉒

と書いている。

同様に『コンスタンタン』では、先に引用した

ところで、文は発話（パロール）に属し、言語（ラング）には属するものではありません。

と書いたすぐ後に、

反論：連辞が発話（パロール）に属するのならば、私たちはここで連辞＝連合という二つの領域を区別するために、言語（ラング）と発

話（パロール）という二つの領域を混ぜ合わせてしまっているのではないのでしょうか？

この点は、まさに、領域の境界に位置する微妙な問題です。解決の難しい問題です。（中略）

連辞に関する微妙な点：発話（パロール）と言語（ラング）との区別。⑳

と書いていて、ソシユール自身、連辞がラングの問題なのか、パロールの問題なのか、決めあぐねている様子が見て取れる。

ここでもう一度、町田健の記述をみよう。町田は同じ著書の別のところでは、

ソシユールは（中略）「ラングは形相であって実質ではない」と述べています。㉑

と書いていて、その内容に矛盾を読み取っていないかのようなのである。

ここで、ソシユールの「forme」と「substance」の訳語について見ておく必要がある。『講義』ではそれぞれ「形態」「実体」、『事典』『基本』ではそれぞれ「形相」「実質」、という訳語になっている。ここでは「forme」の訳語として「形式」を、「substance」の訳語として「実質」を採用することにする。ここで興味深いのは、これらの術語が『第三回』や『コンスタンタン』には出てこないという事実である。㉒

まず、『講義』を見てみよう。

そこ（言語辞項）で観念が音に定着し、音が観念の記号となる。

言語はまた、一葉の紙片に比べることができる：思想は表であり、音は裏である；裏を分断せずに同時に表を分断することはできない；おなじく言語においても、音を思想から切り離すことも、思想を音から切り離すことも、できない；できたとしたら、それは抽象作用によるしかなく、その結果は純粹心理学か純粹音声学のしごととなる。

それゆえ言語学のしごと場は、二つの秩序の要素が結合する境界地域である；この結合は形態をうみ、実体をうみはしない。㉓

いいかえれば、言語は形態であって、実体ではない。⑳

「ラングは形相であって実質ではない」という言説は『講義』に出るときはするが、実はソシュール自身のことばではないことがよく知られている。

さて、ソシュール自身の手稿の発見と、バイイたちが使用した学生たちのノートが生々の形で参照できたばかりか、編者たちの入手できなかったノートまでにあたることができたことは、少なくとも次の二点においてソシュール学の研究を大きく転換させた。一つには、『校訂版』の序でエングラも言っているように、『講義』のなかの用語上の欠陥や矛盾が惹起した議論の一部にピリオドがうたれたことである。主なものを拾うならば、ソシュールの言として至るところで引用される「ラングは形相（フォルム）であって実質（シュプスタンス）ではない」という言葉も、「言語学の唯一にしてかつ真正な対象は、それ自体としてのラングであり、それ自体のためのラングである」という文言も、すべて編者たちの創作である。㉑

が、ソシュール自身「ラングは形式、パロールは実質」と考えていたらしい記述がある。

『第三回』には、

実は、それ自体（物質的な側面）であるかのように思われているものとは、言語なるもの（ラングイスティック）ではない物質であって、語（モ）の外皮が言語なるもの（ラングイスティック）ではない物質を示していれば、言葉（パロール）の研究に属する〈物質〉でしかない、ということになります。（中略）〈この〉視点によって、物質的である語（モ）[訳注：ママ]、それは言語学（ラングイスティック）の視点からすれば、切り捨てられたものです。それは、具体的な対象として言語学（ラングイスティック）には属していません。㉒

という記述がある。

『コンスタンタン』では、

けれども、それ（モノ的な側面）そのものは、それだけでは非言語的なものであり、そうした語の外皮が言語上のものではない実質を表す場合、それは発話（パロール）の研究においてのみ意味を持つものでしょう。その観点から、語のモノ的な側面は、言語学的観点からの抽象であると言えます。具体的な対象としては、言語的なものの一部ではありません。③⑩

とある。

以上のような点を踏まえると、以下のように、形式がラングで実質（厳密には形式+実質）がパロールである、という表になる。

形式（形相・形態）		形式+実質
語・統合（統辞形式）	文	？
ラング		パロール

ここで、竹内芳郎の議論を紹介したい。

ソシュールによると、文の素材である単語（厳密には「形態素」）がラングである。だとすると、こ（れら）の素材をある規則（「文法」）にしたがって組み合わせた結果の「文」はパロールであるということになる。しかしながら、「文」は依然として「形式」のままである。とすれば、これに実質が加わった「発話」こそがパロールではないのか。これが「文とディスクール（discours）」の問題ではないか。

このあたりの事情を、竹内芳郎は以下のように説明している。

ソシュールが文をパロール（パロール）にぞくせしめていらい、多くの言語学者において、文は発話と混同され、せいぜい発話または言表の単位ぐらいにしかかんがえられてこなかった。だが、これは重大な誤りだろう。なるほど、〈語〉は〈文〉にたいして、意味次元の相違をしめすと同時にその構成単位ともなっていると、一応は言えましょう。けれども、文はどのような意味でも発話の単位ともなされるべきではなく、両者は意味次元をまったく異にする二つの概念以外のものではないのだ。③⑪

このように文と発話とを言語意味の次元的区别として定立するためには、言語学を久しく支配してきたソシユールのラングとパロール（パロール）との二大区别を廃棄するか、あるいは廃棄せぬまでも相対化しなければならなくなるであろう。というのも、ソシユールによって、文は端的にパロール（パロール）だとされていたからこそ、爾来、文と発話とが混同されてきたのだといえるからであって、ほんとうをいえば、文は語との対比においてはたしかにパロールだが、発話との対比では一種のラングなのだ。③②

「文と語の関係」におけるラングとパロールの関係をⅠとし、「文と発話の関係」におけるラングとパロールの関係をⅡとして図示すると、以下のように、先の表の「？」の部分に「発話」が入ることになる。

Ⅰ	ラング		パロール	
	語	+統合	文	発話
Ⅱ	ラング			パロール
	形式			形式+実質

この図に従えば、人はラングに基づいて「ことば」を話す、その「ことば」は「～語」そのものではなく、形式であるラングと、実質である（その人の）「声」を結びつけることによって、知覚可能なパロールが出来上がるということになる。また、逆に、ラングは、個人の営みであるパロールによって日々新たな形式を獲得し、異なった「言語」＝ラングへと変貌していく。その際、形式であるラングの具体的な一例を「文」といい、「文」が「声」と結びついて知覚可能、つまり聞こえるようになった実現物を「発話」という、ということになる。③③

〔注〕

- ① 『講義』 p.335 の索引の記述。『事典』 p.374 の索引の記述。『第二回』 p.305 のおよび p.316 の索引の記述。『第三回』 p.334 の用語索引の記述。『コンスタン

タン』には「文」が「phrase」の訳であるとの記載がないが、他の資料の相当部分の訳は「文」である。

ところが、ケルナーでは「phrase」を「句」と訳している。これは、ソーシャルのいうフランス語の「phrase : 文」が英語で「phrase」と訳されているのに気づかずに「句」と訳したと考えられる。「句」と訳した山中氏のソーシャル理解を示していて興味深い（ケルナー (1982)p.416 の索引の記述による）。これは、小林編 (2000) の Gardiner の指摘、「'phrase' [句] とはなんであるか。フランスの文法学者が、'phrase' なる語を英文法のいわゆる 'sentence' [文] の意味に用いる事実 (以下略)」（p.98）を見るとより実感する。

- ② 『講義』 p.336 の索引の記述、『事典』 p.368 の索引の記述、『第二回』 p.313 の索引の記述、『第三回』 p.331 の索引の記述、『コンスタンタン』 p.1 の本文、「基本」 p.5 のラングの説明の見出し。
- ③ 『講義』 p.336 の索引の記述。
- ④ 『事典』 p.373 の索引の記述。「基本」 p.5 のパロールの説明の見出し。
- ⑤ 『第二回』 p.305、『第三回』 p.332 の索引の記述。
- ⑥ 『コンスタンタン』 p.56 の本文の記述。
- ⑦ 『講義』 p.174
- ⑧ 『第三回』 pp.148-149
- ⑨ Ibid. p.186
- ⑩ Ibid. p.261
- ⑪ 『コンスタンタン』 p.164
- ⑫ 町田 (2004) pp.20-21
- ⑬ 時枝 (1941) p.218、時枝 (2007) p.246
- ⑭ 時枝 (1950,1979) p.18
- ⑮ Ibid. p.21
- ⑯ Ibid. p.23
- ⑰ 前田 (1978) p.54
- ⑱ Ibid. p.54
- ⑲ Ibid. p.55
- ⑳ 『事典』 p.299
- ㉑ ガデ (1995) p.130
- ㉒ 『第三回』 p.261
- ㉓ 『コンスタンタン』 pp.164-165
- ㉔ 町田 (2004) p.132

- ②⑤ 「forme」は『講義』p.340の索引の記述。ただし索引には「substance」の項目がないので、『講義』p.171の記述による。『事典』p.289、「基本」p.11の「forme / substance」の項の記述による。
- ②⑥ 『講義』pp.158-159
- ②⑦ Ibid. p.171、この表現は加賀野井(2004)p.105や、ムーナン(1970)p.70にも引用されている。
- ②⑧ 『思想』p.58
- ②⑨ 『第三回』p.161
- ③⑩ 『コンスタンタン』p.101
- ③⑪ 竹内(1981)pp.182-183
- ③⑫ Ibid. p.184
- ③⑬ ソシユールのラングと「文」については、丸山圭三郎が竹内芳郎との対談の中で触れている。「《対談》言語・記号・社会 —— 『文化の理論のために』と『ソシユールの思想』をめぐる——」の「ソシユールと文」(『思想』(1982)のpp.16-17)である。この対談は、1983年に日本放送出版協会から出版された『文化記号学の可能性』に収められている。「ソシユールと文」はpp.198-199、最新版は1993年に夏目書房から出版された『文化記号学の可能性〈増補完全版〉』である。「ソシユールと文」はpp.273-275

【付録1】ランゲージ・ラング・パロール

ソシユールはまず人間の持つ普遍的な言語能力・抽象能力・カテゴリー化の能力およびその諸活動をランゲージ (langage) とよび、個別言語共同体で用いられている多種多様な国語体をラング (langue) とよんで、この二つを峻別した。①

ラングは一応《言語》という訳があてられる概念で、ランゲージがそれぞれ個別の社会において顕現されたものであり、その社会固有の独自の構造を持った制度である。②

ソシユールがランゲージとラングを峻別した視点に立つ限り、前者は潜在的能力であるのに対し、後者は顕在的社会制度であった。ところが、この顕在性は、決して物質性を表すものではない。つまり、社会制度としてのラングは、社会的実現という意味で顕在化して

も、決して具体的・物理的な実体ではない。ある特定の言語にあっては、音声の組み合わせ方、語の作り方、語同士の結びつき、語のもつ意味領域には一定の規則があり、この規則の総体がラングであって、これはいわば超個人的な制度であり条件である。そうすると現実の発話に現れた個々の言表行為（言語行為③）とラングとを同一視することはできない。ソシュールが、特定の話し手によって発話された具体的音声の連続をパロール（parole）とよんで区別したのは上のような考えからであった。したがってラングとパロールの区別という視点に立つと、今度は前者が潜在的構造であり、後者はこれを顕在化し具体化したものということになろう。④

〔注〕

- ① 『事典』 p.63
- ② Ibid. pp.63-64
- ③ 『事典』では「言表行為」とあるが、表現が全く同じ「基本」p.4では「言語行為」と書いてある。
- ④ 『事典』 p.65

【付録2】形相・実質

形相は、実質の対立概念としての「形相」であることに注意されたい。①

ソシュールが言語とは物理的・生理的・心理的事実の集成体ではなく、その本質は、各要素間の関係から成ると述べた考えをL. イェルムスレウが術語化したものであって、《関係の網》にあたる概念である。しかしこの関係態が現実には用いられる場合には、実質に支えられなければならない。自然言語に限って言えば、実質は音的実質と意味的実質の二つに分けられよう。そのいずれも、言語の網（形相）を投影させない限り、どこに区切りを入れようもない連続体（＝生体的ゲシュ

タルトの分節 (articulation) は言語以前に存在するが、この本能の図式がほとんど破綻しているために生じたカオス) であって、それ自体は体系 (systeme) とは無関係な存在である。音的実質が、人間によって発声・聞きわけ可能なすべての物理音であるとするれば、意味的実質は、人間によって体験可能なすべての言語以前の現実である。②

〔注〕

- ① 「基本」 p.11
 ② 『事典』 p.289

2 イェルムスレウの議論

ソシュールは、言語一般について一連の基礎的な考察を行った。そしてイェムスレウは、言語学の観点からその考察を深化させ、言語に関する知識の基礎を確立できるような一般理論が発展するにふさわしい厳密さを加えた。①

イェルムスレウにとっては、

(前略) 言語形式は形式でなければならなかったのである。このことは、1928年に Hjelmlev は *Principe de grammaire generale* を出したときに既に熟していたものであるが、de Saussure の “la langue est une forme et non substance” (Cours, p.161) や “des entites negatives” (p.164) から発展したものであることは明らかである。言理学にあつては、これは図式 (Schema) と用役 (Usage) ——ラングとパロール——になっていることも併せ考えておいてよい。かくて有名な四次元的な言語の世界が形成されるのである。図表 I のようになる。②

図表 I (詳細は省略)

Language (Semiotic)			
Expression Plane		Content Plane	
Substance	Form (Function)	Form (Function)	Substance
Phonetics (et al.)	X = signifiant	Y = signifié	Semantics (et al.)

イエラムスレウは、実はソシユール自身が述べたのではない「言語は形式であって、実質ではない」という『講義』の表現を真に受け、それをもとに図式化した。それゆえに図表 I の「表現の形式面」=X = signifiant と「内容の形式面」=Y = signifié がラングであり、「表現の実質面」がパロールであるという理解になっている。それを図式化すると以下のようなになる。

表現面		内容面	
実質	形式	形式	実質
パロール	signifiant	signifié	現実世界の指示物
	ラング (言語記号)		

また、この図式について、イエラムスレウは、「表現実質」が音連鎖であり、「内容実質」が思想であり、「実質は形態（形式）に依存している」といつている。③

表現面		内容面	
実質	形式	形式	実質
音連鎖	signifiant	signifié	思想
	ラング (言語記号)		

このアイデアに従うと、「語 + 統辞 ⇒ 文」がラングであり、「発話」がパロールということになる。

第二回講義において、ソシユールは、

(二つの無定形な固まりの比較。水と空気。大気圧が変われば、水面は諸単位 (ユニテ) の連続に分解されます。波 (= 実質を形成していない中間的なものの連続！ この波動は結合を、言わば、それ自体では無定形な音声の連続と思考との組み合わせを表わします。これらの結合が、一つの形態を生み出しているのです))。④

と説明したが、これは上記の図を、一方の実質「空気」ともう一方の実質「水」が風によって形式としての「波」を形作るさまとして比喩的に表現したもので、イエラムスレウの発想がいかにかソシユールの

思考に沿ったものであるかということを確認している。

また、丸山 (1975) はその結論の部分において、

また我々はソシユールとともに、ラングはフォルムであることを確認した。(中略)シニフィエ、シニフィアンともにフォルムであってシュプスタンスではない。ソシユールのシニフィエ、シニフィアンは、そのまま直線的にイエルムスレウの《内容 contenu》と《表現 expression》に対応するものではないことは、次の図3 (以下の図) から明らかであろう。⑤

Contenu	substance	= SE	= Signe
	forme		
Expression	forme	= SA	
	substance		

と書いているが、上にあげた表と寸分違わない。

これらの議論とは独立にトルベツコイは、

我々は、発話行為の音論を〈音声学〉(Phonetik) という名称で表し、言語構成体の音論を〈音韻論〉(Phonologie) という名称で表すことにする。⑥

と書いている。これを図示すれば以下のようなになる。

表現面	
実質	形式
音声学	音韻論

この図は、コペンハーゲン学派とブラーグ学派が、ともにソシユールの影響を受けつつも異なったアプローチをとるに至ったのが、言語(ラング) という対象に関する点では、すくなくとも(表現面の)音論においては、共通の結論に至っていたことを物語っている。⑦

〔注〕

① バディル (2007) p.12

- ② イェルムスレウ (1959) p. x vii
- ③ イェルムスレウ (1985) p.61
- ④ 『第二回』 pp.48-49、同様の箇所は、前田 (1991) pp.59-60、福田 (1985)31 号 p.5
に見られる。
- ⑤ 丸山 (1975) p.51
- ⑥ トルベツコイ (1980) p.5
- ⑦ コペンハーゲン学派とプラーク学派の考え方の相違については、稿を改めた
い。

3 服部四郎の指摘

「1」に関連して、どうしても触れておかねばならないのが、服部四郎の議論である。

服部は、

私は、utterance に対する日本語を「発話」、sentence に対する日本語を「文」と決め、「発話」と「文」とはレベルを異にする概念であると定義し、もう4分の1世紀以上も前から、この両者を区別する必要があると、力説してきた。①

と書いている。服部の定義によれば、

発話とは、音声言語表出活動（内部的な心理活動と外部的な行動とを含む）とそれによって生ずる音声のことであって、それは一回きりの出来事であり、同じ発話が2度起こることはない、と想定する。（中略）

このように種々様々な発話が「同じ文」を含んでいることがあるから、文は発話からは独立である。②

つまり、発話は一回限りであるのに対し、文はいろいろな人が同じことを言っている場合に、その個人的な（声の）特徴を捨象したときに残る「形式」面である。そう捉えると、服部の指摘とソシュールの議論との異同が見えてくる。

服部は、ソシュールについて、

さて、de Saussure の langue と parole の概念と、私の考え方との大きな違いは次の点にある。

彼に従えば、langue は「社会的なもの、本質的なもの」であり、parole は「個人的なもの、副次的で多少偶然的なもの」であり、langue は「本質上、等質的である。それは記号の一体系であり、意味と聴覚映像との連合の外に本質的なものはなく、而も記号の2つの部分【即ち signifiant と signifié】が共に心理的であるところの記号の一体系であって、個人の脳裏に蓄えられているのに対し、parole は個人の execution 《遂行》で、1 回きりのものであって、大体私の言う「発話」に当たる。

これに対し私は、「発話」は 1 回きりのもので個人的な実質であるけれども、そこに繰返し現れる社会習慣的な、langue 的な特徴が認められると説き、それを「言語作品」と呼ぶ。一方、脳における心理活動も 1 回きりのもので個人的な実質であって、そこに繰返し現れる社会習慣的なもののみが、de Saussure の langue に当たるのである；脳裏にあるものすべてが社会習慣的なのではない、と私は説く。③

と、服部自身の考えとソシュールの考えの異同を詳細に指摘している。

これらをまとめれば、以下の図のようになる。

ソシュールの langue	ソシュールの parole
服部の sentence : 「文」	服部の utterance : 「発話」

〔注〕

- ① 服部 (1977) p.78
- ② Ibid. p.79
- ③ Ibid. p.82

4 マルティネの場合

マルティネは、ソシユールの「langue」と「parole」を情報理論の用語である「code」と「message」に置き換えた。

しかし、言語学者としては、どうしてもつぎのような心理=生理組織が条件づけられていった結果、通信すべき経験を、その言語の規範にしたがって分析することが許され、必要な選択が、言表のそれぞれの点で、提供されることになる。この条件づけのことを、ほんらい言語（ラング）と呼ぶのである。この言語は、たしかに、発話（discours）によってしか存在をあらわにしないし、あるいはむしろ、言行為（acte de parole）によってと言いなおしてもいい。しかし発話（discours）といい、言行為というものは言語ではない。言語（ラング）と言（パロール）とを対立させるのがしきりになっているが、この対立はコード（code）とメッセージ（message）という用語に言いあらわすこともでき、コードはメッセージの作成を許す組織であり、メッセージのそれぞれの要素をこれと突き合わせてその意味を解くためのものである。①

マルティネははっきりとは述べていないが、「code」というのは単位と組み立て規則という二面からなる複合体で、言語の場合、単位は「音の単位」と「意味の単位」とからなる。音声学的な「音の単位」は「単音」といい、音素論的、あるいは音韻論的な「音の単位」は「phoneme:音素」という（これが上記のトルベツコイの議論であった）。「意味の単位」は「morpheme:形態素」といい、それ（ら）（「音の単位」と「意味の単位」と）が線状（条）構造をなして並ぶとき、それを「sentence:文」と称する。ということは、「sentence:文」は原理的に「音の単位」と「意味の単位」とが同時に展開していることになる。これを「double articulation:二重分節」という。

この「code」を共通基盤として背景に共通に持っている「話し手」と「聞き手」は「意味」を互いに交換しているが、この交換する「意味」を「message」という。

「code」の意味は、だれのものでもなく、みんなのものであり、ある一定の意味、ふつうはそれが辞書の意味である、を持っている。が、だれかがどこかでだれかに対して具体的に「文」を用いると、その「文」は「発話」、つまり「話し手」の「声」に支えられた聞こえる「文」として実現化（realize）し、意味も一回限りのものとなる。これが「message」である。

服部の議論も参考にして図にすると、以下のようになる。

ソシユールの langue	ソシユールの parole
語 + 統合	文
code	message
形式：音の単位、意味の単位、組み立て規則	(形式+) 実質：声
文	発話
「言語」	「ことば」

ここで、「code」が langue : 「言語」であり、「message」が発話 : 「ことば」であるといったら、かなり厳密に「言語」と「ことば」を規定したことになるろう。

〔注〕

- ① マルティネ (1972) p.30

5 チョムスキーの場合

チョムスキーの場合もよく似た二分法をとっている。「competence」と「performance」である。「competence」は「生得能力」と訳されるが、これは、環境からの刺激によって、人であればだれでも、個別言語つまり「～語」が身に付くという能力で、能力というとか動的な印象があるかもしれないが、実はそういう「knowledge:知識」のことで、人はこの知識を遺伝情報として持って生まれてくるがゆえに、環境との相互作用によって、個別言語つまり「～語」が身に付くのである。これは「言語」以前の言語であるという意味で「UG」つまり「Universal

Grammar」と呼ばれる。これがチョムスキーのいう「原理とパラメータ」理論における「原理」である。環境からの刺激によって「パラメータ」が決定した段階をもって、その「～～語」が獲得されたという。「パラメータ」の決定とは、語順がSVOなのかSOVなのか、それともVSOなのか、とか、形容詞は名詞の前で修飾するのか後ろで修飾するのか、とか、前置詞なのか後置詞なのか、といった事項である。

そうして身についた「言語」を、ある場所、ある相手、ある目的等々、具体的な「場面」に即して行われた行為、「ことば」が「performance」である。

そういう意味では、「competence」が「言語」に相当し、「performance」が「ことば」に相当するといっても、あながち的外れではないだろう。

マルティネのところであつた「message」はまさしく「performance」であり、音楽の比喩を用いれば、楽譜が「code」、演奏が「message」つまり「performance」である。だれが演奏してもバッハはバッハであり、モーツァルトはモーツァルトである。しかし同じモーツァルトが、指揮がカラヤンによるのか、ベームによるのか、バーンスタインによるのかによって違う演奏になる、というのは、まさしく一回限りの「performance」が「message」だからである。

【付録3】言語能力 (competence) と言語運用 (performance)

人間は、通例、その母国語（ママ：本来は母語というべきであろう）を自由にあやつる不思議な能力をもっているが、この能力のことを言語能力という。この能力は、必然的に、抽象的なもので、具体的な言語運用の背後にあって、これを規制しているものであると考えられる。変形生成文法が、その一次的な研究対象としているのも、この言語能力の解明ということであり、これを規則の集合によって行おうとしているのである。①

対して、言語運用とは、具体的な場における、言語の現実的使用を

いう。言語能力と異なって、言語運用は、直接観察の対象となり、データに表わすこともできる。言語能力のほうは抽象的な、しかも理想化された存在であるが、言語運用のほうは、具体性が大きく、記憶の限界、不注意、いいなおしやいいよども、言語以外の要素からくる制約などを伴った、不完全な形のものもその中に含んでいる。②

〔注〕

① 安井 (1975) p.74

② Ibid. p.318

【付録 4】 原理とパラメータのアプローチ

現在 (1989 年当時) の生成文法理論は、文法研究に対しいわゆる「原理とパラメータのアプローチ (Principle-and-Parameters Approach)」と呼ばれるアプローチをとっている。この枠組みにおいても従来の生成文法理論と同様に、人間という種に生物学的に組み込まれ、言語の獲得を可能にしている普遍文法 (Universal Grammar, UG) の存在を認め、またこの UG が様々な普遍的下位原理群から成り立っている体系であることを主張する。「原理とパラメータのアプローチ」がそれ以前の生成文法理論と異なるのは、実際に観察される人間言語の多様性を説明するために、UG を構成する下位原理の各々にパラメータを組み込んだ点である。この考えを採れば、UG の諸原理は実際の言語データにさらされる前には各々かなり限定された範囲で変動しうる未確認値 (パラメータ) を持っていて、それらのパラメータの値が言語データによって固定されることによって全体の体系が作動し始める、という構図を言語獲得に対し描くことができる。①

〔注〕

① 井上編 (1989) p.94

6 西江雅之の「伝え合い」

西江雅之は、自身が打ち立てた「伝え合いの人類学」の観点から「ことば」を規定している。

西江によれば、「ことば」とはコミュニケーションを成り立たせる七つの要素の一つであり、「ことば」以外の他の要素とは「身体の動き」「人物特徴」「人物の社会的背景」「空間と時間」「環境」「生理的反応」である。①

西江はさらにこの「ことば」が

- i 言語+パラランゲージ
- ii 脈絡（コンテキスト）（知識、記憶など）
- iii イデオロギー的背景（宗教、政治など）

の三つの要素から成っているとす。②

まず i の「言語+パラ・ランゲージ」について西江は、

言語の一例としての「こちらにいらしてください」という文は、すべての日本語の話者にとっては同じ意味を持っているものとされるのである。

しかし、現実には人の口から出ていることばは、その人物の個性を持った声で話されているのであって、それには言語のみか、男女声の別、年齢的特徴はもちろん、声の大小、強弱、太い細い、優しさ恐ろしさなどの声の質をはじめとし、早口・遅口、つかえなど、さらには命令調、お願い調、皮肉、温かさ、言い聞かせ調などの感情的、性格的な面での声遣いが必ず込められているものなのである。また、声の遠近も重要なものである。③

と書いている。

この paralinguistic について、ナツは『人間関係における非言語情報伝達』の中で次のように書いている。

簡単に言うと、準言語（paralinguistic）とは話す内容ではなくて話し方のことである。④

これには次の二つがあげられる。

A 声の質：これには声の高さの幅、声の高さのコントロール、リズムのコントロール、テンポ、調音のコントロール、共鳴、声門のコントロール、唇のコントロールなどが含まれる。

B 音声化：(1) 声を性格づけるもの (vocal characterizers)、(2) 音声を修飾するもの (vocal qualifiers)、(3) 音声による分離 (vocal segregates)

⑤

次に ii 「脈絡 (コンテキスト) (知識、記憶など)」について西江は、「ことばを交わすということは単に言語としての単語を交わしているのではなくて、そのひとつひとつがことばを通じて当人が過去に記憶した個人的意味領域を持った単語や句を交わしあっているのである。言うならば、ことばはその時の話題に関する個人的記憶や思い出に満ちているのだ。そしてそれが会話の脈絡を成しているのである。」

⑥

また iii 「イデオロギー的背景 (宗教、政治など)」について、「さらに多くの社会ではことばの背景は強力な宗教観や政治イデオロギー、または道徳などの価値判断に支えられているものである。そして、そうしたものが言語そのものによって形成されていることは言うまでもないであろう。」⑦

と書いている。

この西江の考え方によると、ソーシャルのラングは「言語」であり、パロールは、「言語」+「パラ言語」であり、「ことば」は、それに「脈絡」「イデオロギー的背景」が加わったものということになる。

形式	形式+実質：パラランゲージ (当人の声)	
langue	parole	+脈絡+イデオロギー的背景
言語	ことば	

ここで注意すべきことは、Verbal Communication とか Non-Verbal Communication というときに、形式である「言語」が Verbal であり、

言語によるコミュニケーションのことを Verbal Communication というのであって、「ことば」によるコミュニケーションは当然 Non-Verbal Communication であるという事実である。ここのところを理解していないと、Verbal Communication というのはことばによるコミュニケーションのことだと誤解したり、コミュニケーション論の翻訳本を読んでいて、Non-Verbal Communication として「声の調子」と書いてあるのが理解できなかつたりということになる。

音によるコミュニケーションは Sound Communication であり、声によるコミュニケーションは Vocal Communication、ことばによるコミュニケーションは Speech Communication、言語によるコミュニケーションは Verbal Communication である。⑧

この点についての詳細は西江 (1976)、(1980a)、(1988)、(2009-2011)、(2010) 等を参照されたい。

〔注〕

- ① 西江 (1980b) pp.230-243
- ② Ibid. p.230
- ③ Ibid. p.231
- ④ ナップ (1979) p.8
- ⑤ Ibid. pp.8-9
- ⑥ 西江 (1980b) pp.231-232
- ⑦ Ibid. p.232
- ⑧ 西江 (1988) p.212

7 意味分析的に

「言語を話す／しゃべる」とは「言語」に「声」という実質を与えて、知覚可能、聞こえるようにするというプロセスの表現であり、「ことばを話す／しゃべる」とは「言語」に「声」という実質を与えて、知覚可能、聞こえるようにした結果である「ことば」を目的語とする表

現である。

日本語には「結果目的構文」と呼ばれる構文がある。「湯を沸かす」「穴を掘る」「ご飯を炊く」などで、「湯を沸かす」とは「水を沸かして湯にすること」、「穴を掘る」とは「地面を掘って穴を作ること」、「ご飯を炊く」とは「米を炊いてご飯にすること」である。

「ことばを話す／しゃべる」というのはこの「結果目的構文」であって、「言語を話してことばにする」ことである。

以上を踏まえると、「言語」を研究対象にする学問は「言語学」であり、「ことば」を研究対象にする学問は「語用論」「談話分析」「コミュニケーション論」等である。

「言語」も「ことば」も「言語学」の研究対象であるという立場が考えられないわけではないが、その場合の「言語学」は「語用論」「談話分析」「コミュニケーション論」等をも含めた上記とは別の《言語学》というコンセプトによらなければならないはずである。

8 (おそらくは) 理解不足に起因する (と考えられる) 諸問題

ここでは、ラングとパロールに関する誤解について触れたい。

8. 1 事典の記述の問題

一つの例として、野村雅昭、小池清治編の『日本語事典』を見てみよう。この事典の中では、何か所かにわたって「ラングとパロール」に関する記述がある。

ソシユールは、一回的、具体的、個人的側面をパロールと名付け、繰り返しの、抽象的、社会的側面をラングと名付けている。音声には、パロール的音声、具体的音声と、ラング的音声、抽象的音声とがある。前者のみを「音声」とし、後者を「音韻」として別に扱うのが今日の言語学の大勢である。①

言語を、物理的・具体的・個人的・結果的側面から把握したものを

パロルといい、心理的・抽象的・社会的・意図的側面から把握したものをラングという。②

ここであげた二つの引用は、言い方の違いはあるから別の著者の記述であろうと推察できるが、ほぼ同じことを指摘しているという意味では、共通のラング・パロル理解と書いていいであろう。

ところが、同じ事典内の別の個所では、以下のような記述がある。

文章はパロルであるので、語や文のように完結の標識がラングとして存在しているわけではない。③

この記述は「段落・節・章」という項目の記述で、「文」「段落」「節」「章」「文章」について説明し、文章とは「メッセージを構成する言語的まとまり」であるとされている。ところが、メッセージとは何かの説明はない。しかしここでの記述を参考にすれば、「メッセージ」は最終的な意味のまとまりであり、「文章」からなる。「文章」は「章」からなり、「章」は「節」からなる。「節」は「段落」からなり、この「段落」が「文」からなるのである。

という仕組みを前提としたうえで、「文章はパロルである」というのはどういうことをいっていることになるのか。

先に竹内の議論を見たが、彼によれば、〈語〉がラングであるとすれば〈文〉はパロルであり、〈文〉がラングであるとすれば〈発話〉はパロルであるということであった。

これを敷衍すれば、この事典の記述の、「文」がラングであるとすれば「段落」はパロルであるということになり、「段落」がラングであるとすれば「節」はパロルであるということになり、「節」がラングであるとすれば「章」はパロルということになり、「章」がラングであるとすれば「文章」はパロルであるということになるわけで、このように考えて「文章はパロルである」という記述になったのだと考えることができよう。これを図示すれば以下のような表になる。

ラング	パロル			
語	文			
ラング		パロル		
語・文		段落		
ラング			パロル	
語・文・段落			節	
ラング				パロル
語・文・段落・節				文章

あるいは、《語》はラングであるが、それが組み合わさった《文》:「文」はパロルであると解すれば、その「文」の、階層はともあれ、集合である「文章」はパロルであるということになる。ここでの著者の考えはそうなのであろうか。これを図示すれば以下の表になる。

ラング	パロール
語	文・句・段落・文章

しかし、議論はまだ完結していない。「文章はパロルである」とすれば、「メッセージ」は何になるのだろうか。もし「メッセージ」が「文章」に「実質」が加わったものではないのであれば、ここでの記述のすべてはラングに関する記述ということになる。

形式		実質
ラング	パロール	?
語	文・句・段落・文章	

もし「文章」までがラングであり、「メッセージ」はその「文章」に「実質」が加わったものとするならば、「メッセージ」はパロルであるということになる。これを図示すれば以下の表のようになる。

ラング (形式)					パロール (ラング (形式) + 実質)
語	文	句	段落	文章	メッセージ

いずれにせよ、この事典の記述の「文章はパロルである」というのは、非常にあいまいであると言わざるをえないが、それは、この項目

の解説を書いた著者に「形式」と「実質」に関する知識と関心が欠けているからではないか。

「メッセージ」が「文章」に「声：音」という実質が加わったものであるとすれば、これはマルティネのいう「メッセージ」と同じ概念ということになるが、それならば当然「文章はパロールである」ということにはならない。

[注]

- ① 野村・小池 (1992) p.21
- ② Ibid. p.62
- ③ Ibid. p.150

8. 2 大学院入試の問題の問題点

以下にあげるのは、1977年度の大学院の入学試験問題である。上智大学の外国語学研究科・言語学専攻博士前期課程の問題の(3)番の問題である。①

『智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくこの世は住みにくい』
上記の文中の *langue* と *parole* を具体的に指摘せよ。

この問題においては、ソシュールのいうまさしく素材のレベル(語)がラングで、それを組み合わせた「文」をパロールとしている。

が、この質問文に耳を近づけると明らかなように、何も聞こえてはこない。なぜならば「文」は「形式」だからである。ソシュールはこの「文」という「形式」をパロールと呼んだのであろうか。それともそれに「実質(「声」)」が加わった「発話」をパロールとして考えていたのであろうか。この問題こそ、竹内芳郎が投げかけた問題であった。

〔注〕

- ① 「入学試験問題から」(1977) p.119

9 結論にかえて

以上を踏まえて、日本語では以下のように使い分けるとよいのではないかという試案を以下に提案する。

「コトバ」 : ソシユールの langage

「言語」 : ソシユールの langue

「パロール」: ソシユールの parole (ソシユールの langue + 「paralanguage」)

「ことば」 : ソシユールの parole + 「脈絡」 + 「イデオロギー」

「言葉」 : 「単語」

文 献

- 相原奈津江 (2005) 『ソシユールのパラドックス』 エディット・パルク
 イェルムスレウ、L / 林栄一訳・述 (1959) 『言語理論序説』 研究社
 イェルムスレウ、ルイ / 竹内孝次訳 (1985) 『言語理論の確立をめぐる』 岩波書店
 井上和子編 (1989) 『日本文法小事典』 大修館書店
 加賀野井秀一 (2004) 『ソシユール』 講談社
 カデ、フランソワーズ / 立川健二訳 (1995) 『ソシユール言語学入門』 新曜社
 カラー、J / 川本茂雄訳 (1978) 『ソシユール』 岩波現代選書
 ケルナー、E. F. K. / 山中圭一訳 (1982) 『ソシユールの言語論 - その淵源と展開』 大修館書店
 小林英夫編訳 (2000) 『20世紀言語学論集』 みすず書房
 小松英輔 (2011) 『もう一人のソシユール』 エディット・パルク
 スタロバンスキー、ジャン / 金澤忠信訳 (2006) 『ソシユールのアナゲラム - 語の下に潜む語』 水声社
 スリュサレーヴァ、H. A. / 谷口勇訳 (1979) 『現代言語学とソシユール理論』 而

立書房

- ソシュール／小林英夫訳(1940, 1972)『一般言語学講義』岩波書店(『講義』と略す)
- ソシュール／小松英輔編(2008)『一般言語学第一回講義』(リードランジェによる講義記録) エディット・バルク(『第一回』と略す)
- ソシュール／小松英輔編(2006)『一般言語学第二回講義』(リードランジェ、パトワによる講義記録) エディット・バルク(『第二回』と略す)
- ソシュール／景浦峽、田中久美子訳(2007)『一般言語学講義 コンスタンタンのノート』東京大学出版会(『コンスタンタン』と略す)
- ソシュール・小松英輔編(2009)『一般言語学第三回講義』(コンスタンタンによる講義記録+ソシュールの自筆講義メモ) エディット・バルク(『第三回』と略す)
- ソシュール／山内貴美夫訳(1971)『ソシュール言語学序説』勁草書房
- 互盛央(2009)『フェルディナン・ド・ソシュール - 〈言語学〉の孤独、「一般言語学」の夢』作品社
- 竹内芳郎(1981)『文化の理論のために - 文化記号学への道』岩波書店
- 竹内芳郎・丸山圭三郎(1982)『《対談》言語・記号・社会 —— 『文化の理論のために』と『ソシュールの思想』をめぐって——』『思想』岩波書店、pp.1-35、(1983)『文化記号学の可能性』日本放送出版協会、(1993)『文化記号学の可能性〈増補完全版〉』夏目書房
- 立川健二(1986)『《力》の思想家ソシュール』風の薔薇
- デュボア、J 他／伊藤晃、木下光一、福井芳男、丸山圭三郎・泉邦寿・小野正敦・戸村幸一編訳(1980)は『ラールス言語学用語辞典』大修館書店
- 時枝誠記(1941)『國語學原論』岩波書店(岩波文庫版は時枝誠記(2007)『国語学原論』岩波書店)
- 時枝誠記(1950,1979)『日本文法 口語篇』岩波全書、岩波書店
- トルベツコイ、N. S.／長嶋善郎訳(1980)『音韻論の原理』岩波書店
- ナップ、マーク・L／牧野成一・牧野泰子共訳(1979)『人間関係における非言語情報伝達』東海大学出版会
- 西江雅之(1976)【連載】「伝えあいの人類学」『言語』大修館書店
- | | |
|----------------------|------------|
| 1 (1976.1) 伝え合い・文化・人 | pp.80-87 |
| 2 (1976.2) コード・要素 | pp.82-89 |
| 3 (1976.3) “ことば” | pp.84-91 |
| 4 (1976.4) “ことば”その2 | pp.80-87 |
| 5 (1976.6) “ことば”その3 | pp.108-114 |

- 6 (1976.7) “メッセージ”をめぐる話題 pp.88-94
- 7 (1976.8) “メッセージ”をめぐる話題 2 pp.99-105
- 8 (1976.9) “メッセージ”をめぐる話題 3 〈“ことば”補足〉 pp.112-117
- 9 (1976.10) “伝え合い”をとらえる pp.79-84
- 10 (1976.11) 最終回 文化・コード pp.90-95
- 西江雅之 (1980a) 「口承伝承の記述」『講座言語第 4 卷言語の芸術』大修館書店、pp.245-275
- 西江雅之 (1980b) 「“伝え合い”とその仕組み」、日高敏隆責任編集『平凡社カルチャー today - 7 ふれあいの哲学 交わる』平凡社、pp.222-244
- 西江雅之 (1988) 「ことば」『コミュニケーション事典』平凡社、pp.208-214
- 西江雅之 (2009-2011) 【連載】「マチヨ・イネの文化人類学」『考える人』新潮社
- 1 (2009.4) 言語とは「ことばの標本」である pp.151-158
- 2 (2009.7) “ことば”だけではつたわらない pp.189-196
- 3 (2009.10) 意味を伝えるもの pp.181-188
- 4 (2009.12) 伝え合いにつきまとう「制約」 pp.211-218
- 5 (2010.4) 伝え合いにおける“文化の檻”——空間 pp.208-215
- 6 (2010.4) 伝え合いにおける“文化の檻”——時間 pp.129-137
- 7 (2010.10) 沈黙のことば pp.117-124
- 8 (2010.12) ことば通じて、意味通じず pp.129-136
- 最終回 (2011.7) “異なる”ということ pp.234-242
- 西江雅之 (2010) 【連載】「出会いと言葉」『現代思想』青土社
- 1 (2010.5) わたしと“ことば”、そして“言語”との関係 pp.38-44
- 2 (2010.6) 「ことば」に触れる pp.50-60
- 3 (2010.7) 「言語」に触れる pp.8-16
- 4 (2010.8) 「言語」の置き換え pp.8-17
- 5 (2010.10) “異なった言語”間の接触へ pp.8-15
- 6 (2010.11) “ピジン”に向けて pp.40-48
- 7 (2011.1) “ピジン・クレオール”と呼ばれる諸語 pp.32-38
- 8 (2011.3) “言語”の誕生と死 pp.8-15
- 9 (2011.4) クレオール語の背景 pp.8-13
- 野村雅昭、小池清治編 (1992) 『日本語事典』東京堂出版
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』岩波書店
- 服部四郎 (1977) 「Utterance と Sentence」『ロマンス語研究』11、日本ロマンス語学会、pp.78-90

- バディル、セミル／町田健訳 (2007) 『イエラムスレウ - ソシユール最大の後継者』大修館書店
- ブーイサク、ポール／鷺尾翠訳 (2012) 『ソシユール超入門』講談社
- 福田毘之 (1985a, b, c) 『言語と言語学』 21 p.6, 22 p.7,8, 24 p.3, FLL
- 前田英樹 (1978) 「ソシユールと“言語過程説”〈その相違の本質〉」『言語』 Vol.7, No.3 大修館書店、pp.50-55
- 前田英樹 (1991) 『ソシユール講義録注解』法政大学出版会
- マルティネ、アンドレ／三宅徳嘉訳 (1972) 『一般言語学要理』岩波書店
- 町田健 (2004) 『ソシユールのすべて 言語学でいちばん大切なこと』研究社
- 松澤和宏 (2013) 『フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集』 I 自筆草稿『言語の科学』岩波書店
- マウロ、トゥリオ・デ／山内貴美夫訳 (1976) 『「ソシユール一般言語学講義」校注』而立書房
- 丸山圭三郎 (1975) 「ソシユールにおけるパロールの概念」『言語における思惟性と技術性』朝日出版社、pp.36-53
- 丸山圭三郎 (1978) 『「一般言語学講義」の基本概念』『言語』 Vol.7, No.3 大修館書店、pp.2-13 (「基本」と略す)
- 丸山圭三郎 (1981) 『ソシユールの思想』岩波書店 (『思想』と略す)
- 丸山圭三郎 (1982) 「ソシユール - その方法と思想」『歴史と社会』 1、リプロポート、pp.64-93
- 丸山圭三郎 (1983) 『ソシユールを読む』岩波書店
- 丸山圭三郎編 (1985) 『ソシユール小事典』大修館書店 (『事典』と略す)
- 三輪伸春 (2014) 『ソシユールとサビアの言語思想 - 現代言語学を理解するために』開拓社
- ムーナン、G／福井芳男、伊藤晃、丸山圭三郎訳 (1970) 『ソシユール 構造主義の原点』大修館書店
- 森山茂 (2014) 『「ソシユール」名講義を解く! ヒトの言葉の真実を明かそう』星雲社
- 安井稔編 (1975) 『新言語学辞典 改訂増補版』研究社出版
- 「77年度大学院(言語学専攻)入学試験問題から」(1977)『月刊言語』九月号 Vol.6 No.10、pp.118-121

本稿を、2015年6月14日午前2時6分に新たな異郷へと旅立たれた恩師、西江雅之氏に捧げる。

【付録5】 訳語 ガデ (1995) p.216

原著	小林英夫	丸山圭三郎	デュボア	ガデ
discours	話線	ディスクール	談話	言説
entite	実在体	本質体	—	存在体
forme	形態	形相	形式	形式、形態
image acoustique	聴覚映像	聴覚イメージ	音響映像	聴覚像
immotive	無縁	無動機の	無動機の	無契的
langage	言語活動	ランガージュ	ことば	言語、ランガージュ
langue	言語	ラング	言語	言語、ラング
motive	有縁	動機づけのある	動機づけのある	有契的
parole	言	パロール	言、ことば	言葉、パロール
signifiant	能記	シニフィアン	記号表現	記号表現
signification	意義	意義	意義	意味作用
signifié	所記	シニフィエ	記号内容	記号内容
sujet parlant	話手	語る主体	母語の話し手	語る主体
substance	実体	実質	実質	実質

小林英夫は『講義』、丸山圭三郎は『事典』、デュボアは『ラールス』、ガデは『ソシユール言語学入門』である。

上記の表に前田と福田とを加えた「langage」「langue」「parole」の訳のみあげる。

	小林	丸山	デュボア	ガデ	前田	福田
langage	言語活動	ランガージュ	ことば	言語、ランガージュ	ことば	言語性
langue	言語	ラング	言語	言語、ラング	言語	言語系
parole	言	パロール	言、ことば	言葉、パロール	言葉	発話

前田は前田英樹『ソシユール講義録注解』、福田は『言語と言語学』

である。

個性的な福田訳を丸山訳と対比してあげる。

原語	丸山訳	福田訳
arbitrariness	恣意性	没意性
langage	ランガージュ	言語性
langue	ラング	言語系
parole	パロール	発話
positif	ポジティブ	凸画的
negatif	ネガティブ	凹画的
syntagmatique	連辞	結辞
paradigmatique	連合	選辞
unite	ユニテ	単位
context	コンテキスト	文脈
analogy	アナロジー	類似
descour	デスクール	談話（言述）
synchrony	共時的	時代的
diachrony	通時的	歴史的
signe	シーニュ	記号
signifiant	シニフィアン	外記（外面記号）
signifié	シニフィエ	内記（内面記号）
Image acoustique	聴覚映像	音像（音のイメージ）
forme	形相	関網（関係の網）

福田『言語と言語学』24、p.3